

多田政一博士の著書から（95）詳細版

第三篇 「全體動的病原學」提唱

理事 田中敏彦氏選

1935 年（昭和 10 年）刊行『綜統醫學提唱論』より

《本文》

余は本編に於て如上^{※1}の生理學上の全體平衡論の提唱に對して異議なき諸子が果して醫學究極の目的たる「治療」と云ふ圈内に於て果して現代醫學の行き詰りを打開可能なや?と云ふ問に答へたい。

學理上の全體論^{※2}に對して無條件に賛同される諸子は、その賛同がそのまま「具象上^{※3}の全體醫術^{※4※5}」となり得るならば、學術即治療^{※6}が綜統によつてこよなき福祉を人類に與へる事を反對すべき何物の理由もないであらう。

余は生理學者として、かうした具象例として供すべき病人材料の獲得に著しく不便であつた。然し幸なるに、局所醫術より全體醫術への啓明に活躍する余の主義下の綜統醫學會の會員より提供された記名レポート（病人自身の全治録）を數箇取りて論を進める事が赦されている。通俗的ではあるが真相を記した、かうした病人自己の手記になるこの報告を眺めながら慢性疾患に對する全體醫學即治療の奇効を眺めたい。

勿論綜統醫學會及大乘醫學會要則^{※7}の一項にも見える如く、これ等の病人は全て現代醫療の下に不治であつたと云ふ物（根治と云ふ意味に於て）であり既にかくした救済は數百人に互つて施され、その中の涙にあふるる感謝録の一端を上げて叙述の便にするにすぎない。

余は生理學を對象とする者なる故に、かくした臨床方面の分野に互つては觸れるべくもないのであるが、少なくとも醫學を是正するには「學術上の論據^{※8}の正鵠^{※9※10}」と「臨床上の効果」の2點に同機的に著目して、理論即治療、學會即大衆のもとに進まねば到底目的を達すべくもない故に、余儀なく本篇の論述に數章を當てる所以である。

既述せる如く本書の學的にて且つ通俗に墮せざるかうした「中間的論述^{※11}」はこの目的に叶ふであらう。

解説

《語句説明》

- ※1 如上：上に述べた通り、先ほど言ったように
- ※2 學理上の全體論：病気や健康を、体の部分ではなく、人間全体の構造と働きの中で論理的にとらえようとする考え方。
- ※3 具象上：目に見える事や、実際に体に起きていることをもとに考えるやり方
- ※4 全體醫術：体の一部分だけでなく、体全体を一つのまとまりとして見る医療の在り方。
- ※5 具象上の全體醫術：実際の医療現場で行われる具体的かつ全体的な医術。
つまり抽象的な理論にとどまらず、実際の診療の場で、全体論を体現した医療を行うこと。
- ※6 學術即治療：全體醫學即治療、理論即治療、學會即大衆
- ※7 要則：守らなければならないルール
- ※8 論據＝論拠
議論のよりどころ。議論・論証の根拠
- ※9 正鵠：物事の核心や要点や急所を意味する熟語
- ※10 學術上の論據の正鵠：学問的な根拠の核心や急所。単なる理論の提示ではなく、医学を実際に変革しうる革新的根拠。
★「學理上の全體論」と「具象上の全體醫術」は対になっている。
 ➡理論的枠組みがその理論に基づいた実践医療
- ※11 中間的論述：学問的過ぎず、軽すぎず、その中間をとった説明

《所感》

全体生理平衡論の提唱に異議を唱えない人が、治療という範囲で現代医学の行き詰まりを打開できるかという問いに答えられています。

学理上の全体論に対して無条件に賛同される人が、体に起こっている事（症状など）を全体医学的な視点での医療を行うならば、学術はそのまま治療になりうるだろうと言われています。

（生理学者としての）博士は、全体医術（全体的に観る医術）がそのまま治療に通じるのだと言われているのだと思います。そして多くが現代医学的治療（局所医術）において不治の患者です。

そして医学を正しく立て直すには、「学問としての本質的な根拠」と「実際の治療における成果」という二つの面に同時に注目しなければならない。だからこそあえてこのこと

を書いておられるのです。

本書の内容は、専門的過ぎず、かといって単純すぎない、ちょうどよいレベルの説明、即ち中間の立場で書かれているので、理論と治療の両方をつなぐという目的に合っています。

《詳細》

「せいこく正鵠」について

「学術上の論拠の正鵠」は、多田政一博士が「全体動的病理学」を提唱するにあたって、既存の学術的知見のうちでも、最も核心を突いた根拠・要点に照準を合わせているという意味合いで使っておられるのでしょう。

多田博士の提唱では、西洋医学や東洋医学など複数の体系を統合しようとする中で、「学術上の論拠の正鵠」を明示することによって、単なる思想や仮説ではなく、厳密な学問的基盤に立脚していることを強調しています。

ここで多田博士は、医学を正す（改革・刷新する）ためには次の二点を同時に重視することが不可欠であると述べています：

- ・ 学術上の論拠の正鵠：理論や思想の核心、学問的な根拠の「い的を射た部分」
- ・ 臨床上の効果：実際の治療における成果・実証された効果

多田博士が「正鵠」という言葉が使われたのは、単なる論理や抽象理論ではなく「い的を射た、核心を突いた学術的根拠でなければならない」という意味を込めてのことだと思います。

第三篇「全体動的病理学」をやさしく解説してみます

現代の医学では、からだの悪くなった「部分」だけを治そうとするやり方が多くなっています。でも、それではうまくいかない病気もたくさんあります。だから「からだ全体のバランス」が大事だと考えて、「全体医学」という新しい考え方を提案しています。

この考えに賛成してくれる人は多いけれど、問題は、それを実際の治療に使ってちゃんと効果が出るか？ということです。

私自身は研究者で、患者さんをたくさん治療する立場にはなかったけれど、「綜統医学会」という仲間の医師たちが、実際にこの考えを使って治った患者さんの記録（レポート）を提供してくれたのです。

その中には、普通の病院では治らなかった人たちが、全体医学の方法で元気になったケ

ースもあります。

もちろん、これはすごく大きな成果で、今の医学がうまくいっていないところに新しい道を開いていくかもしれない。

しかし、「理論（考え）だけじゃダメだし、効果（治療の結果）だけでもダメです。学問としてきちんと説明できることと、実際に人が治ることの両方が大事なのです。」

だからこの章では、その両方をしっかり見ながら、全体医学がどんなふうに人を助けられるかを説明しています。